空軍参謀長等招へい行事 シンポジウムの概要

前航空研究センター長
元空将補　**福　島　　睦**

※本稿で記載した職名、階級はシンポジウム参加時のものである。

2014 年に創設 60 周年という大きな節目を迎えた航空自衛隊（以下「空自」という。）は、わが国の防衛と関係の深い各国空軍参謀長等を日本に招へいし、同年 10 月 23 日（木）から 27 日（月）までの間、「空軍参謀長等招へい行事（Air Chief's Dialogue in Japan: ACDJ）」を実施した。

10 月 24 日、オーストラリア、インド、インドネシア、イギリス、アメリカ、ベトナムおよび日本の空軍参謀長等が出席する ACDJ シンポジウムを開催した。ここでは、「将来の空軍力」という全体テーマの下、１　アジア太平洋地域の安定化のための役割、２　空軍力と科学技術、という２つのセッションを設け、発表と意見交換が行われた。

本シンポジウムは、共通の議題について意見交換し、各国空軍種の代表者間の相互理解の促進を目的としている。すなわち、「今そこにある危機」に対して抑止・対処するだけでなく、将来を見通し、自国の防衛力の在り方を思い描き、組織を変革し、人々を率いていくことが重要である。中でも空自および各国空軍は、その防衛力整備に長期間を要するため、共通の価値観を有する代表者が、アジア・太平洋地域の安定と繁栄を目指して、将来の空軍力の在り方、特に空軍力の役割や進展著しい科学技術と空軍力の関係について議論し、将来に向けての方向性を共に見いだすことが必要である。一方、アジア太

平洋地域では、大規模な自然災害が多発する傾向にあり、また、領土や主権、経済権益などをめぐる、純然たる平時でも有事でもない、いわゆるグレーゾーンの事態が増加する傾向にある。このような不安定要素をはらむアジア太平洋地域の安定化のために、空自および各国空軍がどのような役割を果たすべきか、という点について意見を交わすことも狙いに含まれていた。

はじめに、アメリカ太平洋空軍司令官ローリー・Ｊ・ロビンソン大将により、「将来の空軍」と題した基調講演が行われ、続いて、航空幕僚長齊藤治和空将が「将来の空自の役割」と題して、次の講演を行った。

将来の空自の役割

―蒼き空を明日へつなぐ―

皆さんこんにちは。本日は各国空軍参謀長（Chiefs）ならびに司令官(Commanders)の皆様の前で、航空自衛隊航空幕僚長としてお話しする機会を得、大変光栄に思います。

空自創設 60 周年記念のキャッチフレーズは「蒼き空を明日へつなぐ」というものです。この言葉の意味は、蒼く澄んだ空に象徴される平和な世界を、次世代の人達につないでいこうというものです。本日は、平和な未来のために、空自がアジア太平洋地域においていかなる役割を果たしていくか、ということについてお話ししたいと思います。

経済のグローバル化や科学技術の発展によって諸国間の相互依存関係が拡大・深化している現在、今やどの国も一国で自らの平和と安全を維持することはできません。われわれは地理的には離れておりますが、本日ご参加いただいている国々は、同盟国やパートナー国です。

はじめに安全保障環境の全般を概観すれば、冷戦期の長引く緊張感に加え、国力の進展に伴い自らが新秩序作りの主役となる事を企図した国家が、力によって一方的な現状変更を試みる等、既存の国際社会の枠組みへ挑戦するようなことも起きて

います。また、大規模災害や非国家主体による国際テロなど、脅威のボーダーレス化も進んでいます。こうした特定の地域での平和と安定の維持・回復のため、多国間の共同による対応が求められる中、エア・パワーが果たす役割も拡大、多様化しています。

次に科学技術の分野について述べたいと思います。近年の科学技術の発展、特に情報通信技術の大きな進歩は、社会のあらゆる分野に大きな変化をもたらしています。それは軍事分野においても例外ではありません。情報共有を容易にし、指揮・統制を迅速にしたネットワーク化は、戦場認識能力の優位性の獲得と効率的な戦力運用を可能にしました。

他方、こうした科学技術の進展は、同時に宇宙空間やサイバー空間への依存度を高め、これらが新たな戦場と広く認識されるに至りました。宇宙空間においては、ミサイルによる人工衛星破壊実験が行われており、宇宙の自由かつ安定的な利用に対する大きな脅威となっています。また、サイバー空間ではネットワークを通じた攻撃が国際社会に深刻な影響を与えています。

したがって近年では、海空に加え、宇宙空間、サイバー空間といった国際公共財に対する自由なアクセスを妨げるリスクが増大しており、国際社会の大きな課題となっています。

こうした安全保障環境の変化の中で、これからのエア・パワーが担う役割は、その打撃力によって航空優勢を獲得するという Traditional な役割と、平時における地域の復興・平和構築や災害復旧などによる地域の安定化という Non-Traditional な役割に大別することができるでしょう。エア・パワーがもつ「迅速性」、「機敏性」、「汎用性」という Advantage は、戦時に発揮されるのみならず、災害復旧時における航空輸送力などに見られるような Non-Traditional な分野においても有効なのです。

他方、エア・パワーには Disadvantage もあります。例えば、陸上戦力とは違い、エア・パワーはその威力発揮において地域的、時間的な占有力（Persistence）に欠けるため、たとえ脅威を排除しても、その状態を長期間維持することが困難です。また、テロ組織が一般市民に紛れ込んでいるような場面においては、これを限定して攻撃することが極めて困難であり、同時にコラテラル・ダメージを生じるリスクも避けられません。最近は技術進歩によって、無人機などによる継続的なＩＳＲ活動ならび

に精密攻撃による予期しない被害の抑制が可能となりつつあるものの、それでもなお、エア・パワーのみで戦争に勝利することは極めて難しいといえます。つまり予期される戦闘様相下での脅威に有効に対処するためには、作戦当初から陸海作戦との融合を図る必要がありますが、それは時に戦闘のエスカレーションにつながります。これらの特性を国家としての意思決定権を有する政治的リーダーシップに正しく伝え、最適なオプションを提示できることが、従前以上に重要なものとなってきています。

空自は、引き続きわが国の防空という Traditional な役割を果たしつつ、これまで以上にアジア太平洋地域の平和と安定の維持に取り組んでいきます。近年、わが国の周辺では弾道ミサイル能力の向上と航空機による活動が活発化しており、冷戦の緊張が高まっていた 1984 年に空自が行った緊急発進の回数は 944 回であったのに対し、昨年度の緊急発進の回数は 810 回に及びました。このような周辺諸国の活発な軍事活動に対処するためには、いかなる事態においても航空優勢を確保し得る態勢を保持しなければなりません。そのためには同盟国と協力しつつ、ステルス機や無人機の導入等、防空および弾道ミサイル対処能力の向上や常時継続的なＩＳＲ活動の強化によって、航空優勢確保のための防衛力を整備していきます。

このように、わが国の安全保障環境によって空自は引き続き抑止と対処という Traditional な役割を求められておりますが、このようなわが国自身の努力は、東アジアの不安定化を防ぐ不可欠の要素でもあると考えます。

また、今後導入する C-2 や新たな空中給油・輸送機等によって、空自はＨＡ/ＤＲ等の Non-Traditional な能力の強化を図り、アジア太平洋地域の平和と安定により大きな役割を果たしていきます。

他方、厳しい財政状況の中で以上のような防衛力を整備していくためには、予算の一層の合理化、効率化に努めるとともに、国際共同開発といった視点も必要ではないかと考えています。他国との共同開発によって経費を削減できるだけでなく、協力国との信頼関係や相互運用性を高め、防衛力の透明性も向上させることができるという効果も期待できます。わが国では本年４月に防衛装備移転三原則が定められ、これまでよりも積極的な国際共同開発や防衛装備の海外移転が可能になる環境が整いました。これらの取り組みもまた、地域の安定化につながるものです。

わが国の安全保障法制については、本年７月に安全保障法制の整備に係る閣議決定

がなされ、今後の法整備がなされた場合には、集団的自衛権が根拠となる行動や国際平和協力活動についてもさらに積極的に取り組むことが可能となります。わが国が平時有事を問わず地域諸国と協力できる法整備を行うことは、地域全体の平和と安定に極めて有益でしょう。ここでＨＡ/ＤＲ活動についてみてみますと、例えばアジア太平洋地域では、大規模自然災害による民生の不安定化が国家や地域の混乱をもたらし、安全保障上の問題を生じる潜在的要因ともなり得る可能性があります。そういった中で、ＨＡ/ＤＲ活動による迅速な復旧・安定が、被災者の救助という人道上の目的に合致するのみならず、長期的には地域の安定化・平和の維持という目的に直結してくるのです。

これまで述べてきたような多国間協力による地域の安定化を実効性あるものにするためには、協力する諸国間のインターオペラビリティの向上が必要です。通常、インターオペラビリティ向上の方策といえば、まずは装備の共通化が思い浮かびますが、われわれアジア太平洋の国々の間では必ずしも装備面での共通性は高くありません。よって、そうした国々が円滑に協力するためには、各国が Operation の手順を共有することで International Coordination を効率化していくことが重要なのです。いわば共通の Standard Procedure といったものを平素から確立すること、そうした部隊運用という「ソフトウェア」におけるインターオペラビリティが求められているのだと思います。

空自は創設以来 60 年の月日をかけて、アジアの平和に欠かせない米軍との高度なインターオペラビリティを培ってきました。これを日米空軍種間にとどめることなく、さらに地域諸国間の協力の中で広めていくことが必要です。そのためには、先に述べた Standard Procedure を共有するというアイディアを、今後、より形有るものにしていくことが重要だと考えています。先ほど、エア・パワーが持つ「迅速性」、「機敏性」といった Advantage について述べましたが、特にＨＡ/ＤＲ活動の初期段階において、このようなエア・パワーの Advantage を最大限に活用するためには、共通の Standard Procedure を確立することが必要なのです。今のところ、こういった Standard Procedure の枠組みがすでに２つ存在していると認識しておりますが、例えばこのような既存の枠組みを活用およびブラッシュ・アップして、さらに実用性のあるものにしたいと思います。

冒頭に述べた「蒼き空」もまた、われわれ皆が共有すべきものであり、わが国だけがそれを次世代に受け渡すことができるというものではありません。本日ご参加いただいている国々のエア・パワーが力を合わせ、希望に満ちた「蒼い空」を広げていきましょう。どうもありがとうございました。

この後、第１セッションが始められた。

「アジア太平洋地域の安定化のための役割」をテーマとした第１セッションでは、オーストラリア空軍本部長ジェフ・ブラウン中将が「アジア太平洋地域の安定化に向け将来の空軍が担う役割」、ベトナム防空・空軍司令官ファン・ミン・ホア中将が「空軍の将来」、についてそれぞれ発表した。そこでは、地域の安定化を進めるためには、空軍としても各国と連携してルールと規範に基づいた地域の安定化を進めることの重要性について、相互に理解が深められた。とりわけ、伝統的な安全保障ばかりでなく非伝統的な安全保障について、地域が一体となって協力することの必要性が認識された。地震、洪水などの災害派遣や捜索救難、海賊対処などに対して空軍を含め、多く国の協力関係構築の必要性について意見が交わされた。そして、安全保障上の脅威が多様化する中、空軍力の役割もこれまでの伝統的な軍事的脅威への対応に加え、予防から復興、安定化といった、フル・スペクトラムの対応が求められることが確認された。また、特にアジア太平洋地域の安定化のためには、多国間での協力による相乗効果を生み出すことが重要であるとの認識が高められた。

第２セッションでは、「空軍力と科学技術」のテーマを受け、インド空軍参謀長アルプ・ラハ大将が「空軍力と科学技術」、インドネシア空軍参謀長イダ・バグス・プトゥ・ドゥニア大将が「将来の空軍力：将来のインドネシア空軍」、英国空軍参謀長アンドリュー・プルフォード大将がユーモアあふれる「中央競馬の 20 年」と題して発表した。このセッションでは、空軍の発展は、科学技術と密接な関係があり、劇的な早さで進歩する科学技術を素早く取り入れることがキーポイントである、と認識された。今日の情報通信技術の発達に見られるように、航空兵器システ

ムは空、宇宙、さらにサイバーへと広がりを示しており、引き続きそのことへの理解が必要である。そして、新たな科学技術をエア・パワーに取り込んでいくことが、今後ますます重要になる。また、エア・パワーが能力を発揮する上で不可欠な、宇宙空間やサイバー空間等の新たな領域の安定的な利用という観点からも必要とされている。このような技術研究および開発においては、単に兵器開発のみならず、いかに将来を予測し、新技術を利用していくか、また人材を育成していくのか、といった難しさが存在している。地域の各国が可能な範囲で協力、連携することが、全体としてより効率的、効果的な技術力の進展につながるとの認識が深められた。

最後に、航空幕僚長齊藤治和空将が次のように発言し、本シンポジウムを結んだ。

本日の発表では、国際法や国際慣習を各国が尊重することの重要性が理解された。さらには、法の秩序を空中のみならず宇宙空間やサイバー空間へ及ぼしていく必要性が理解された。本日各国から頂いた有意義な意見は、ここにお集まりいただいた友人たちのみならず、地域の全ての国々に広げ、認識を共有することが重要だと考えられる。

もちろん航空自衛隊も自国の防衛や国際平和協力活動を積極的に実施すること等により、地域の、ひいては世界の平和と安定および繁栄を実現するため引き続き責任ある役割を担っていく考えである。

今までも、そして将来も、空の秩序と安定を担うのは、われわれ空自および空軍にほかならない。このシンポジウムは、そのような取り組みの第一歩である。本日この機会が、お集まりの皆様の一層の相互理解を深め、蒼き空を明日へとつなぐために協力していくきっかけとなれば幸いである。